

寓話が意味するもの

—『寓話』試論—

植野達郎

『寓話』はフォークナー自身が主要な作品となるだろうと思っていたにもかかわらず、早い時期から失敗作、それも「よく言っても高貴な失敗作」と判断されていたが、『寓話』の基本的な問題点は…信じがたい要素とリアリスティックな要素が不適切に混在していることから生じている」(230)とクレアンス・ブルックスは断じている。その具体的な例として伍長が銃殺されて倒れた時に、まるでキリストをなぞるように茨の冠（実際には有刺鉄線であるが）を頭に乗せたり、三本足の馬が走るだけでなくレースに相次いで勝利を収めるという、まさに現実にはありえないことが描かれていることにあと指摘している。

ブルックスに限らず『寓話』を失敗作と判断する理由が「信じがたい要素」と「リアリスティックな要素」の混在だとすれば、それを混在させた意図はどこにあるのだろうか。物語の中心となる出来事は、第一次世界大戦のフランス軍の伍長と12人の兵士が主導した戦闘放棄という「反乱」と、密告者のためにその内容が明らかになり、反乱を企んだ者たちの処刑であることは間違いない。しかし、三本足の馬のエピソードや、軍隊で栄光を求めていた若き飛行士レヴィンが現実の欺瞞に絶望して自殺するエピソードや、伍長の説得に失敗した牧師が自殺することが、軍隊内の反乱とどのような関係にあるのかは判然とはしない。一見すると関係がないように思えるエピソードを手掛かりに中心となる物語を考える時、それまで気づくことがなかった一面が浮かび上がることがある。たとえば、『八月の光』において、ジョアンナ・バーデンはジェファソンの町の人々にとっては黒人

びいきの北部人として敬遠されていたが、彼女が喉を切られて殺されると、彼女は黒人によって殺された白人として見做される。彼女自身の内実は変化していないのだが、彼女が置かれるコンテクストが変化したことによって、ジェファソンの町の人々にとっての彼女の見え方が違ってくるのである。『寓話』においても視点をずらすことによって見えてくるものがあるのではなからうか。

伍長が主導する反乱は、第一次世界大戦が始まって4年経過した1918年の5月に起きた。伍長が所属するグラニオン師団の連隊の三千人が戦闘を放棄しただけでなく、それに呼応するようにドイツ軍も射撃を控えたのである。戦争とは、戦闘に勝利を収めて敵を降伏させ、結果として平和をもたらすことであるとすれば、平和をもたらすために戦闘を行わないことはどのような意味を持つのであろうか。少なくとも戦闘の当事者にしてみれば戦闘が行われない状態は、つかの間であれ、心安らぐ時であらう。もし、その状態が継続するならば、すなわち永遠に戦闘が行われないとするならば、平和をもたらしたことになるのであろうか。戦闘を行わないことが戦争の終結に直結するのであれば、戦闘の停止は平和をもたらすと言えるであらう。しかし、戦闘を始めたことが戦争の根本原因ではないであらう。というのも、「戦争を生み出したのはわれわれではない。戦争がわれわれを造りだしたのだ。人間の激しく、根深い貪欲から、人間の必要性に合わせて大尉や大佐が生み出されたのだ。われわれの存在は人間の責任である。人間に責任の回避をさせてはならぬのだ」(54)と、いみじくも総軍司令官である老将軍が語っているように、戦闘を行っているのは兵士たちであるが、兵士たちに戦闘を行わせているものは戦争なのであり、その戦争は人間が持つ貪欲、そして人間の必要性が起こしたのである。戦争を始めたのが兵士でないとすれば、戦争を終わらせるのも兵士ではないであらう。

伍長を含めた12人の兵士が平和を求めて戦闘を停止しようとし、師団の三千人の兵士がその呼びかけに応じたことは、老将軍にとってはどうも容認できることではない。兵士が戦闘を放棄することは、兵士が兵士であ

ることを否定することであり、それを認めることは軍隊という組織を否定することである。フランス、イギリス、アメリカ三軍の司令官である老將軍は軍隊を否定する行為を万難を排して排除しなければならない。これは軍隊という組織の問題であり、老將軍の個人的な思惑によって左右される問題ではない。

老將軍は貴族で、億万長者として生まれたが、孤児であったので、母親の姉であるフランスで最も力を持つ閣僚の妻によって育てられた。さらに彼の名付け親は独身であるとともに軍需品を製造する巨大な国際組織の議長だったので、少年は両親が残した遺産だけでなく、伯父や名付け親の財産をも継承することになる。この少年が17歳の時にサン・シールの士官学校に入学した。彼は「専門的経歴を身につける候補者からなるクラスの一人の無名の生徒に過ぎず、軍隊の厳格な階級制度だけでなく、その後の50年間を生き延び、脅威として恐れられるためでなく記念碑として尊敬されるためにのみ壊滅的な敗北や屈辱的な敗北から立ち上がるべく苦闘することになる軍隊に身を置いた」(248)のである。そして一族の影響力を使うことなく士官学校始まって以来の最高点で卒業し、卒業するとすぐにアフリカへと旅立った。このことによって、少年は自らの力で人生を切り開くことを宣言したのであり、士官学校の生徒からの「嫉妬、憎悪、恐怖から永遠に解放される」(251)ことになったのである。

ここには士官学校の世俗的な生徒たちの中に身を置きながらも、一人だけ世俗的なものから遊離しようという気構えを見て取ることができる。自らの力で手にしたものではない権力や影響力を行使するのでは、真に人心を把握した指導者になることができないことを理解しているのである。さらにアフリカで6年間勤務した後、チベットのラマ寺に13年間滞在した。アフリカの駐屯地を離任した後パリに戻ることなく東方へ向かったのは、アフリカで経験した一つの出来事が関係していたのであろう。その出来事とは、駐屯地がリフ族に包囲された際、その包囲網を解くために一人の犠牲者を供出したというものである。そのことを「後悔するため」なのか、「待つため、あるいは準備のため」(270)なのか、その真意は不明であるが、パ

りに戻らずに東方へ向かった。そしてチベットから軍隊に戻ってからは昇進を続け、総軍司令官にまで登りつめたのである。

総軍司令官の現在に至る経歴は、紛れもなく彼の優秀さを示している。巨万の富を手にすることが約束されているだけでなく、軍隊においてもその頂点に位置する老将軍に対して、サン・シールの級友たちは、彼は手にしている燦然ときらめく機会を用いて官能的な欲望を満たすだろうと考えるのに対し、士官学校の同期生であった主計総監は、自分自身とフランスに栄光をもたらすために用いるだろうと考えるが、バターワースは両者とも間違っていると断言する。彼らが忘れてしまっていること、あるいはまったく理解していないことは、「大いなる遺産に付随するもっとも重要なものは責任だということ」(63)を。さらに、この責任とは「西洋文明のあらゆることに対する責任を引き受けることである」(80)と述べている。しかしながら、バターワースの指摘は、富と権力を手にしている老将軍に求められていることを敷衍して述べているに過ぎず、老将軍の行動の動機の説明とはなっていない。フランス、イギリス、アメリカ三軍の司令官である老将軍にはドイツを倒すことは求められているが、そのことは西洋文明に対する責任を引き受けることまでは意味しないであろう。結果として、西洋文明の中心に位置すると考えられるパリを守ることにはなるかもしれないが。

ここで問うべきことは、バターワースが述べているように、大いなる遺産を手にするようになる人間の責任とは何なのかということなのだろうか。あるいは士官学校の生徒が考えたように、富と権力を手にする者がそれを何に用いるかということなのだろうか。老将軍はそれらの問いかけを超越しているのではないだろうか。というのも、老将軍は自身を「世俗的な世界の優勝者」(348)と規定しているからである。この言葉は伍長を「人間が非現実に対して抱く根拠のない希望と無限の能力、否、情熱という秘密の世界の優勝者」と規定することによって、老将軍が位置する現実世界に取り込むことが企図されていることを忘れてはならないが、それでも老将軍が到達した自己認識を明確に表していることは間違いない。

老将軍が言うところの世俗的な世界とは、軍隊という厳格な階級制度によって維持されている世界ではないのか。軍隊という組織が機能するためには、個々の意思が尊重されるのではなく、上官からの命令が恙無く果たされねばならない。それ故、たとえば飛行士としての栄光を夢見るレヴィンがドイツ軍の戦闘機を攻撃したにもかかわらず、その弾が空砲であったことを知って、理想が現実には何の意味を持たないことを思い知らされ、自殺するとしても、軍隊としてはいささかの痛痒も感じないであろう。また、師団長であるグラニオンは、「参謀将校たちと専門家たちが失敗に終わる詳細な計画を練り上げた」(40)のであれば、その計画に従って攻撃を行うことが求められているのである。たとえ、その結果として部隊が壊滅的な損害を被ったとしても、その攻撃計画を立案した参謀将校や専門家に非があるのではなく、攻撃が失敗した責任は師団長であるグラニオンが負うのである。しかし、戦場に「反乱を引き起こす部隊を送り込んで」(40)しまったグラニオンは、攻撃を行う命令を果たすことができずに、その責任を取らされて銃殺される。軍隊の規則に忠実に従うことで師団長にまで昇進したグラニオンは、軍隊という組織に反乱を起こした部隊の長として軍隊の規則に則って責任を取ることになるのである。

とするならば、軍隊ではグラニオンという個人が問題なのではなく、師団長という位階が問題となる。師団長はグラニオンでなくてはならないわけではなく、彼の代わりはいつでも用意されている。軍隊に限られるわけではないが、組織が組織として機能するためには個人の特性を尊重しながらも、それを絶対視することは許されない。そうでなければその個人が欠けた時に、組織を維持することは困難になるからである。そうした個人と組織の関係をうかがわせるのが、伍長を目の前にしたイギリス人大佐、フランス人少佐、そしてアメリカ人大尉がそれぞれ伍長の死を確認したことを断言するエピソードである。この奇妙なエピソードは、伍長が時と場所を超えて自在に存在したことを示しているのであろうか、あるいはそれぞれの国の士官たちが思い違いをしていることを示しているのだろうか。現実にはありえないことを信じるのでなければ、このエピソードが語ってい

ることは、伍長が遍在すること、それは伍長と認めうる兵士がそれぞれの国の軍隊にいたことを示しているのではないか。つまり特異な存在としての伍長ではなく、取り換えが利く兵士の象徴としてこのエピソードがあるのではないだろうか。

グラニョンは軍隊という組織の根幹をなす階級制度、そしてその規則に依拠することによって存在しているのであるが、老将軍は軍隊の規則から逸脱することをも許された存在であると言えようか。その意味では、軍隊に身を置きながらも、老将軍一人だけは軍隊に囚われていないかのようである。そのことが遺憾なく発揮されるのが伍長と相對する場面である。老将軍は戦闘放棄という反乱を起こした首謀者であるとともに、実の息子である伍長と相對するのであるが、彼は伍長との会談で何を目的としていたのだろうか。というのも、伍長との会談の前日に伍長の異父姉であるマルトと対峙したのであるが、マルトが「それでは彼は死なねばならないのですね。あなたの実の息子は」(301)と確認したように、老将軍の心の中では伍長が死ぬことは既定の事実だったことをうかがわせている。それにもかかわらず伍長との会談を実現させた老将軍の意図はどこにあるのだろうか。

伍長との会談において老将軍は自由、富、権力といった、この世界に属する者であれば手に入れたいと思うものを列挙して、現実的な力を与えることを持ちかける。それらの誘いに対して伍長は「まだ十人います」と繰り返すが、老将軍の誘いそのものに対して諾否をしたわけではない。しかも老将軍は伍長が強いこだわりを抱いている十人の兵士に関しても答えを用意している。「われわれがあてにしようとしているのはおまえではなく彼らなのだ。おまえの利益のためにはおまえたち十一人全員を滅ぼし、おまえの脅威と犠牲の価値を十倍に高めなければならない。わたしの利益を考えれば、彼らも解放しなければならない」(347)と、老将軍は伍長の懸念やこだわりを見透かした上で、現実にも目を向けるように誘いをかけている。

老将軍の現実を見る目は的確である。戦争を行う軍隊の最高司令官として「この状態はあと一年しか続かない…来年にはいわゆる平和を——しば

らくの間にすぎないが——手に入れるだろう」(343-344)と、現状を分析している。ここで語られていることは、直面する課題にだけ目を向けるのではなく、もう少し長い時間軸の中で現在の出来事を考えることの必要性である。伍長は眼前の戦闘を停止させることに腐心し、一時的にはあれ成功させるが、結果としては反乱は失敗に終わり、反乱の首謀者として処刑を待つ身である。一方、老將軍は戦争が悪徳であり、愚劣であることを認識しているとともに、戦争が一年後には終結することも予測している。「ヨーロッパのもっとも優れた兵士であるドイツ軍がほぼ四年間に渡り膠着状態から抜け出せなかった戦争を、月曜日の五分間で無効にした」(345)伍長の功績を十分に認識しているからこそ、老將軍は伍長が軍隊の規則に従って処刑されることを大きな損失と考えている。

と同時に、反乱の首謀者として死を覚悟している伍長の処刑を免じたからといって、伍長そのものを救うことにならないとも考えていたのではないのか。伍長自らがこの世界で生きるという決意を抱くことが必要だったし、自らが生きたいという意思を表明することが求められていた。アーゴは老將軍の「究極の目的は曖昧模煇としている」(5)と語っているが、老將軍の目的は明確であろう。戦争という悪徳を戦闘によらずに終わらせようとした伍長を、戦争を遂行する軍隊の論理で処刑することから救い出すとともに、現実世界で生きていく意欲を奮い起こすことを企図しているのである。

とするならば、ここで考えるべきことは伍長の反応であろう。彼が頑なに老將軍の提案を拒むのは何故なのだろうか。伍長自身は自らを語ることがほとんどないので、彼の言葉からはその真意が見えてこない。老將軍は伍長の行動の意味を軍隊の長という立場から理解していた。逆に言えば、伍長の視点、あるいは彼に付き従った兵士たちの行動は理解できなかったのではないだろうか。だからこそ、彼は伍長に拒絶されることがわかっているにもかかわらず、さまざまな提案を投げかけたのではないだろうか。老將軍は自身を「この世俗的な現世の優勝者である」と規定するとともに、伍長は「非現実に対して人間が抱く根拠のない希望や、人間が持つ際限のない受容力、

否、情熱という神秘的な領域の優勝者である」と語ることによって、伍長は老将軍が理解できない人物であることを明言している。伍長が根拠のない希望や情熱という論理では割り切れない領域に住む人物であるという認識を示すことは、老将軍の限界を浮かび上がらせている。老将軍自身はそのことを理解していないかもしれないが。

その限界とは人間に対する理解であろう。『寓話』の冒頭で、「掘っ立て小屋やアパートから小道や路地や名前もない袋小路へと入り込み、そして細流が小川に、小川が川になるように、小道や路地や袋小路が合わさって街路となり、やがてすべての町の人々が広い大通りを流れていき、車輪のスポークのように大広場へと流れ込むように思える」(4)と、人々の流れが俯瞰されている。この意思を持たないかのように思える人々の動きを老将軍は見守ることしかできない。老将軍が力を発揮する世界は、軍隊という規律が支配する領域でしかない。川と擬せられた人々の動きは、人間の手には負えない自然の力を持つものと見做されるだろうが、無定形と思われる人々は集団として一つの意味を持って突き進んでいくのである。

「世俗的な現世の勝利者」と自らを規定し、伍長を「神秘的な領域の勝利者」と規定した老将軍はさらに続けて、両者は「相容れないものではなく…この限定された闘技場で並び立つことができるし、もしもお前の立場が私の立場に干渉しなかったならば、並び立ち得るし、並び立つことだろうに」(348)と語るが、その言葉は矛盾している。ここで「干渉しなかったならば」と表現されていることからわかるように、事実上は干渉していたことが明らかとなっている。老将軍が述べようとしていることは、現世の勝利者と神秘的な領域の勝利者は戦争という状況でなければ共存し得たということであろう。しかしながら、二人が置かれている状況は軍隊である。戦闘に勝利を収めることによって平和を手に入れることが求められるのが軍隊であるとすれば、戦闘を放棄することによって得られる一時的な平和を軍隊の長である老将軍は認めることができない。老将軍は伍長に向かって「戦争は破産からの最後の手段となる」(344)という認識を示しているように、戦争の根本には経済的な問題が横たわっているのだとすれば、

戦闘を停止するだけでは問題を解決することにはならないのである。

とするならば、ここで問題となっていることは、現実を現実たらしめていることがらと、非現実を希求する人間の希望や情熱の共存のあり方であろう。すなわち、現実を現実たらしめていることがらとは、法や規則によって秩序が保たれる世界であり、その最たるものが軍隊である。それに対して非現実を希求する人間の希望や情熱とは、そうした法や規則によって保たれる秩序から逸脱することである。たとえばヴィカリーは「自由の探索は個人と社会との間の葛藤を、そして私的な価値と軍隊用語で述べられているもっと大きな、あるいは社会的な善との葛藤を必然的に生ずる」(215)と述べ、老將軍と伍長の立場は基本的に相容れないとしている。

この老將軍と伍長の関係を象徴的に表しているのが、三本足の競走馬のエピソードではないのだろうか。三本足の競走馬のエピソードは、『寓話』においては落ち着きの悪いエピソードと見做すことができるものである。というのも、件の三本足の競走馬の舞台はアメリカ南部であり、馬の法律上の持ち主はアメリカの石油王である。そしてイギリス人の馬丁、年老いた黒人の説教師、騎乗する12歳の少年がその馬とともに、さまざまな追っ手の追跡を逃れつつ、アメリカを渡り歩き、レースでは勝ち続けるのである。しかしながら、『寓話』の主たる舞台である第一世界大戦とは直接の関係はないし、伍長が主導した部隊の反乱とも無縁のエピソードに思えるのである。馬とともに追跡を逃れるイギリス人の馬丁が、やがてフランス軍の部隊に配属されて、その部隊の高利貸しとして登場したり、年老いた説教師が息子をドイツ軍に殺された女性の援助を受けて、サターフィールド牧師として「全世界からのフランスの友人たち」という協会を設立するという連関はあるにしても、三本足の馬のエピソード自体は『寓話』においては違和感を抱かせるものであることは否定できそうにない。

それにもかかわらず、フォークナーは三本足の競走馬のエピソードを組み込んだ。そこには、このエピソードが提起する主題が『寓話』においてなくてはならないものとなっているからではないのか。黒人の説教師が犯罪者として追われることを覚悟の上で馬を連れて逃げたのは、「レースで他

の馬の前方を走り抜くことしか望まず、そのことしか知らない馬が、ケンタッキーに連れ戻され、生涯、単なる種馬となることから救うため」(198)だった。三本足の馬はレースで走り続け、やがてその生涯を閉じるのだが、犯罪者の烙印を押されながらも馬にその本来の姿を全うさせる三人の行為は、非難される行為なのだろうか。三本足の競走馬がレースで圧勝するという、現実にはありえないことが起きる時、合理性や論理性を超越したものの存在を容認する意図が込められている。

競走馬はレースで走ることにその存在理由があるとするならば、三本足の馬がレースで勝つという、まさに非現実的な出来事を描くことによって、合理性が支配している現実世界に、そしてその合理性に根本的な問を投げかけているのではないか。このことを伍長の反乱に重ね合わせる時、伍長の反乱の意味が浮かび上がってくる。軍隊という戦闘を行うことが当たり前だと見做されている組織の一員である伍長が三千人もの兵士に戦闘を放棄させたことは反乱と規定され、処罰を受けることが決定される。これが現実世界の対応である。しかしながら、三千人のフランス軍兵士のみならずドイツ軍の兵士も戦闘を放棄したことは、戦闘放棄という非現実を希求することにある種の正当性があったことを物語ってはいないだろうか。反乱を起こした部隊は、軍隊は戦闘を行うことが当然であるという現実的な合理性に異を唱えたのである。その異議申し立てによって、伍長が率いる部隊は「戦争の本質的な空虚さを暴いた」(12)のであるというアーゴの指摘にとどまらずに、戦争そのものに対して根源的な否を突きつけたのである。

敵、味方ともに多数の死傷者を出すことになっても、相手を打ち倒すことによって平和を手にすることが戦争の目的だとするならば、死傷者を出さずに平和を手にするを模索することがあってもいいのではないか。たとえ、軍隊が戦闘を放棄するという非現実的な選択によるものであったとしても。三本足の競走馬が走ることができなくなればその存在が無に帰すこともやむを得ないように、戦闘を放棄したことによって戦争が終結しなければ、戦闘を放棄した部隊はもはや消滅するしかないであろう。戦闘

放棄を主導した伍長は、死を覚悟している。その伍長を現実に戻すことが老将軍の誘いであり、説得であった。最終的に老将軍は現実世界の勝利者には似つかわしくはないが、一人の人間としての本音とも思える話をする。

やがてお前は年をとり、そして死を目にする。そのとき気がつくことは、何ものも、何一つ、何一つ、権力も、栄光も、富も、快樂も、苦痛からの自由ですら、単に息をしていること、忘れ去ることができないという後悔の念や取り戻すこともできない、使い古した肉体の苦悩を抱えながらも、単に生きていることに比しては、何の価値もないことに。(350)

これは権力、栄光、富、快樂を手にしてきた老将軍だからこそ口にできる言葉である。しかしながら、単に息をしていること、そして単に生きていることに最大の価値を置くことは、死ぬことを覚悟している伍長に対する説得とは到底思えない言葉であり、あたかも老将軍の人生の悔悟の念を表明しているかのようである。すでに死ぬことを受容している伍長に生きていることの大切さを説く老将軍は、伍長の中に生きることを断念していない感触を抱いているのであろうか。というのも、老将軍の誘いに対して伍長は拒絶の意思を表明するのではなく、「まだ十人います」と答えていることにかすかではあれ、誘いを続ける脈があると判断したのであろう。だからではないのだろうか、ミシシッピの殺人者のエピソードを持ち出したのは、受刑者は死刑判決が下されても無実であることを叫び続けていたが、牧師の話を何度となく聞くうちに、現世を捨て去って罪を償う瞬間を心安らかに待っていた。しかし死刑が執行される直前、一羽の鳥が小枝に止まりさえずった。すると地上の悲しみと苦悩から永遠の安息に旅立とうとしていた男は、天国も救済も不滅の靈魂もすべてを捨て去り、無実だと叫んだのだ。それ故、死を受容しているように思えても、人間は命を選ぶものであり、伍長にも「鳥を選べ」(351)と誘うのであった。が、伍長は「まだ

十人います」と答えるだけである。結局、老将軍は伍長の決心を翻意させることができずに二人の会談は終わる。

しかし、老将軍は諦めることなく牧師を遣わして、伍長に生きる意志を持つようにと誘う。牧師は聖書の言葉を引きながら、グラニョンの命を救うために伍長の決断を迫る。「あなたが私に言うことを行わないことによってグラニョンの命を救うことができるにしても、すでに私には救うことはできないし、救おうと思っても救えないのです。それから彼に言ってください。私も死にたくはないのだと」(362-363)と語る伍長は、死ぬことを求めているわけではないことを明確に表明している。しかし、牧師は一言「あの鳥を思い出すのだ」(366)という言葉が発することにより、老将軍の代理に過ぎないことを露呈させる。神に仕えているはずの牧師が現実世界の人間に仕えていることを明らかにすることによって、牧師は牧師としての存在を自ら否定しているのである。結果として牧師は伍長に死ぬことを翻意させる立場を放棄し、伍長によって救われることを望むのであるが、伍長が救う立場にないことを理解すると、牧師は自死するのである。

伍長は、自由、支配するための世界、そして命を与えるという老将軍の誘いを拒み、さらにグラニョンの命を救うという牧師の要請も断り、処刑される。一体、伍長の心を占めているものは何なのだろうか。老将軍からの誘いに対して、伍長は「まだ十人います」と答えるだけであった。伍長と行動を共にした十人の扱いは老将軍の裁量に委ねられていて、処罰せずに解放することも可能であったろう。そこにはその十人を解放したとしても、伍長の態度は変わらないという認識が両者にあったのではないだろうか。というのも、もしも誰一人処罰を受けないとすれば、反乱という事実そのものが存在しないことになりかねないからである。とするならば、伍長が提起した戦争そのものに対する根源的な問いかけも無効になってしまう。老将軍にしても、反乱が結果としては失敗に終わったのであるから、伍長が行ったことはわずか数時間、戦闘が行われなかったということに過ぎず、老将軍にとっては痛痒を感じるようなことではない。巨視的に見れば、戦争の大勢に微塵も影響を与えてはいないのである。しかし、軍隊に

においては上意下達の命令を無視することは、階級社会という軍隊の根幹に関わることなので等閑視することはできない。とするならば、反乱があったという事実を前にして、老将軍と伍長が採るべき道は一つしかないことになる。反乱に関わった人物の処刑である。

しかしながら、老将軍は伍長を高く評価している。「お前は三千人の男たちを説得して確実に、即座に死ぬことを受け入れさせる力と才能を持っている…働きかけることができる世界と、私がお前に与えることができる遺産を用いれば、できないこと、やれないことは何一つないであろう」(349)と、軍隊で兵士を掌握し、反乱へと向かわせた伍長の能力を現実世界で発揮し、世界を変革することを持ちかける。軍隊という強固な組織に反旗を翻した伍長が現実世界で活躍する機会を与えられれば、想像しうる最大の仕事ができるだろうという認識を示す。ところが伍長を評価するとともに、権力を握っている者の傲慢さを老将軍は露呈させる。「お前は神になり、人間の素朴な欲望や食欲など足元にも及ばない、はるかに強力な要素によって人間を永久に支配するのだ。人間の勝ち誇った、根絶できない愚かさによって、そして導かれ、惑わされ、騙されることを望むという人間の消え去ることのない情熱によって」(349)と述べ、老将軍が人間を蔑視していることが明示されるのである。

しかし、老将軍が伍長と交わす会話は人間に対する見方を対照させている。老将軍は語る。

「私は人間を恐れはしない。それだけではない。人間を尊敬し賞賛する。さらに誇りに思う。人間が妄想が作り出した天上での不滅性を誇りに思うよりも人間が現に所有している不滅性を十倍も誇りに思う。なぜならば人間とその愚かさは——」

「耐え忍ぶでしょう」と伍長は言った。

「それに止まらない」と老将軍は得意げに言った。「人間とその愚かさは勝利を収めるだろう。——戻ろうか」(354)

ここで老将軍は「得意げに(“proudly”）」語っているが、これは同時に「高慢にも」語っているのではないか。老将軍は現世では最高司令官の立場にあることによって、兵士を、そして人間を個性を持った存在ではなく、ものとして抽象的に捉えているのである。その意味では、論理的、合理的な説得力を持つ発言を連ねている。それに対して伍長はあくまでも個々の存在にこだわっていて、人間の愚かさを含めて受け止め、人間に信頼の念を置いている。ここに至って老将軍と伍長の違いはこの小説の冒頭の人々の動きを川のイメージで描いた場面と重なってくるのである。すなわち、人々の動きを俯瞰する立場に身を置く老将軍は、川を構成する個々の人々を見ることはない。

とするならば、老将軍が自らを「現世の優勝者」と規定したが、これは図らずも優勝を目指すレースに参加したものを対象としたレースではなかったか。それは軍隊という枠内でのレースでしかなかったのである。しかし、レースに参加することが当然視されている時、レースに参加しない意味を問うたのが伍長であった。老将軍が亡くなると、英雄と目されて無名戦士の墓に埋葬される。しかしそこにはすでに反乱を主導した伍長が埋葬されているのである。この時、「現世の優勝者」である老将軍の偉大さが相対化されていることが、読者に向けて発せられている。

さらに老将軍の葬儀に際して、松葉杖をつき、腕と足がそれぞれ一本しかなく、帽子をかぶっていない顔の半分は髪の毛もなく、目もなく、耳もない火傷の跡をつけた元連絡兵が、「司令官殿、これはあなたのものです。受け取ってください」(436)と叫び、身に着けていたフランスの勲章、それは反乱の主導者である伍長のものであるのだが、それをひきちぎり、「勝ち誇ったわけではないが、不敵な」(436)笑いを浮かべて投げつけたのである。彼が浮かべるこの笑いは何を笑ったものなのだろうか。多数の死傷者を出して戦争を終結させたことを記念するとともに、勲章を授与することによって死傷した兵士たちを表彰するという典礼を欺瞞として明らかにしたこと、すなわち現実世界で受け入れられている制度の虚妄を表現したことに対する満足感であったのだろうか。

元連絡兵はただちに排除され、単に面倒を起こす人物と評されるだけである。しかしながら、一人の元兵士が倒れている元連絡兵を抱き起こし、「私は笑っているのではない。あなたが見ているのは涙だ」(437)と、元連絡兵に寄り添い、彼の行動を是認する言葉でこの小説が閉じられる時、その時代の常識であるとか制度を超越したものを希求することが肯定されているのである。

こうして、現実にはありそうもない三本足の競争馬や、伍長をめぐるエピソードは閉じられる。そこには、現実にはありえないからこそ描くに値するものがあつたのではないだろうか。小説だからこそ、そして寓話だからこそなしうることは、現実を支配している合理的思考では捉えきれないものを追究することであつた。

Works Cited

- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*. New Haven and London: Yale University Press, 1978.
- Butterworth, Keen. *A Critical and Textual Study of Faulkner's A Fable*. Ann Arbor, Michigan: UMI Research Service, 1970.
- Faulkner, William. *A Fable*. New York: Random House, 1954.
- Straumann, Heinrich. "An American Interpretation of Existence: Faulkner's *A Fable*" *Three Decades of Criticism*, ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery, New York: Harcourt, Brace & World, 1963, pp. 349-72.
- Urgo, Joseph R. "Conceiving the Enemy: The Rituals of War in Faulkner's *A Fable*". *Faulkner Studies* Vol. 1:2 (1992).
- Vickery, Olga W. *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1959.

